解説1　ヒロシマが告げるもの

石川逸子

人類初の原子爆弾が、広島・長崎市民の上に投下されてから、六十二年目の夏がやってくる。たった一個の爆弾が、それぞれの街にもたらした惨禍の凄まじさ。それは、原民喜の「コレガ人間ナノデス」というわずか七行の一篇の詩に凝縮されているともいえる。

コレガ人間ナノデス
原子爆弾ニ依ル変化ヲゴラン下サイ
肉体ガ恐ロシク膨脹シ
男モ女モスベテ一ツノ型ニカヘル
オオ　ソノ真黒焦ゲノ滅茶苦茶ノ
爛レタ顔ノムクンダ唇カラ洩レテ来ル声ハ
「助ケテ下サイ」
ト　カ細イ　静カナ言葉
コレガ　コレガ人間ナノデス
人間ノ顔ナノデス

地上五七〇米前後で炸裂した原子爆弾は、二万トンのエネルギーを放射、爆心の直径一五〇米の温度は、摂氏九〇〇〇度にも達している。気圧は数十万気圧。人間の肉体などひとたまりもなかった。花恥ずかしい女学生も、峠三吉が「仮繃帯所にて」で記したように、「血とあぶら汗と淋巴液とにまみれた四肢をばたつかせ／糸のように塞いだ眼をしろく光らせ／あおぶくれた腹にわずかに下着のゴム紐だけをとどめ」た姿をさらすしかなかったのだ。「褌一つの生徒たち　見も知らぬ人達」にまじって、無我夢中で山に登っていった福田須磨子。「火をふいている家　つぶれてる家／切断された電線うめく声・声・声」の間をさながら「死の行列」のように。

一瞬にしてむごたらしく変容した街で、ひとびとが悶え苦しんでいるとき、ポツダム会談を終えて帰国途上にあった米・トルーマン大統領は、巡洋艦上で高らかに声明している。

「これは原子爆弾である。原爆は宇宙の根源的な力を応用したものである。極東の戦争責任者たる日本に対して、太陽の原動力ともなっている力が放出されたのである。七月二十六日、ポツダムで最後通告が発せられたのは、日本国民を破滅から救わんがためであった。日本側首脳はこれをただちに拒否した。この期におよんでもなお、当方の要求を拒絶するにおいては、有史以来最大の破壊威力を持つ爆弾の雨がひきつづき彼らの頭上に降りそそぐことになろう……」

ヤルタ会談では、スターリンに北方領土を⊠に対日戦参加をもとめたものの、原爆投下で日本を降伏させれば、アジアを一手に牛耳れる、かつ原爆の効果も実験できる、トルーマンにとってはまさに一石二鳥だったのであろう。

今もって米政府は、原爆投下は正義だったとの立場を変えていない。

在米原爆被爆者協会名誉会長として長く在米被爆者のために尽くしつづけた故倉本寛司は、援護法を州で、次には連邦政府で作ってもらおうとして営々努力して果たせず、米大統領に手紙を送ったところ、「アメリカは正しい戦争をして正しい爆弾を使ったのだから、援護の必要はない」と一蹴されている。

ただ、ここで、原爆投下をよろこんだのは、米国だけでなく、日本に侵略されていたアジアのひとびとも同様であったことを肝に銘じねばならないであろう。

栗原貞子が、「ヒロシマというとき」に表した視点である。

〈ヒロシマ〉といえば
〈ああ　ヒロシマ〉とやさしくは
返ってこない
アジアの国々の死者たちや無告の民が
いっせいに犯されたものの怒りを
噴き出すのだ

マレーシアの中華系教科書副読本には、原爆の絵が描いてあり、投下によって犠牲者は多く出たが、自分たちはようやく救われたと記してある。大日本帝国がおこなった数々の残虐をまず反省することから始めねば、原爆の惨は、かつての日本の占領地域にはなかなか伝わっていかないであろう。

そして、その⊠りを受けたのは、日本人ではなく、むしろ帰国していった韓国被爆者であったのだ。故郷にもどっても、原爆を喝采している同胞には、その惨はわかってもらえぬままに、後障害で病み、亡くなっていった人たち。

本来なら、植民地にされたがゆえに暮らしが成り立たず、日本に渡ってこざるを得なかった、あるいは徴兵・徴用で一大軍事都市である広島・長崎に強制連行された朝鮮人被爆者に対しては、日本人より先に援護し、補償するのが筋というものであろう（柳生じゅん子「形見」のように、同じく強制連行され、過酷な奴隷労働に抗議したために広島・長崎の刑務所に入れられ、被爆した中国人もいる）。しかし、日本政府は、徹底的に戦後も差別し、当事者が裁判を起し、勝訴するまではそっぽを向いてきたのであった。

ところで、原子爆弾の非人道性は、猛烈な熱線、強烈な爆風のみではない。爆心直下の放射線の量は三万ラッド（五〇〇ラドで、人間の生命は異常をきたすというのに）。

フランスの詩人ジャック・ゴーシュロンによって追悼された、移動劇団、桜隊の俳優たち。たいした怪我もなく、「助かったのよ。私助かったのよ」と神戸の知人の家によろこんで飛びこんだ園井恵子も高山象三も、ほどなく「ぬぐってもぬぐっても浮き出す血に／のどをつまらせながら」死んでいった。仲みどりは、破れシーツを身にまとい、東京の母の家に必死にたどりついたにもかかわらず、八月十六日には東大病院に入院、潰瘍、高熱で苦しみ、病院あげての努力にもかかわらず、同月二十四日帰らぬ人となる。

しかし、以後、開発された核兵器のもつ放射能のすごさは、広島・長崎の比ではない。

それどころか、貯蔵しているだけで、その毒性は、周辺のひとびとを死に追う。

アメリカ、ワシントン州ハンフォード核施設
高レベル放射性廃液を貯蔵している巨大タンク１４９個のうち
60 個以上のタンクから廃液が漏れ
地表から 65 メートル下の地下水に達する
さらにハンフォード風下地域の住民は
放射性ヨウ素１３１を気象観測用の風船を使ってばらまかれ
１マイル四方に住む 28 家族のほとんどが癌患者である

―伊藤芳博「世界の終わりに」より

だが、ヒバクシャたちの苦悩をあざ笑うように、現在、米国は一万発の核爆弾、ロシアは一万六〇〇〇発保有、両国とも五〇〇〇発以上を実戦配備している。核兵器保有国は、ほかに英・仏・中・印・パキスタン・イスラエルなど。

また、イラク戦争で米英軍がさかんに使用している劣化ウラン爆弾。天然ウランから核兵器や原子炉燃料に使うウラン２３５を取り出した残渣、ウラン２３８で造った爆弾は、人間の体内に入ると猛烈な毒性を発揮し、しかも半減期は 40 億年におよぶ。湾岸戦争ではじめて使用され、イラク国民のみならず、米軍兵士一八万二〇〇〇人が疾病・障害補償を要求しているというのに、性懲りもなく使われた。これこそ大量破壊兵器ではないか。

その米軍を後方支援して、自衛隊をイラクに送りつづける日本政府。ハーグ国際司法裁判所で核兵器の違法を真摯に訴えた伊藤一道市長は、本年四月、選挙戦の真只中、暴漢により銃殺された。これこそ憎むべきテロであるのに、テロ、テロ、と日ごろ騒いでいる安倍首相のコメントは、「真相をよく調査して」と至って緊迫感がない、お座なりのものであった。

では、希望はないのだろうか。

「追う者」で、長谷川龍生は、「おまえたちは矛盾におちいっている。／人間を抹殺できない／俺たちを抹殺できない」と指摘し、「殺されても、八つ裂きにされても／俺たちの追いかける歴史はつづく／歴史はつづきながら、　だんだんと／追う者の数は大きくなり／鋭くなり、優れてくる／そして最後に審判する。」と書いた。

原爆投下にいち早く反応した、トルコの詩人ナーズム・ヒクメットの「死んだ女の子」。「開けてちょうだい　たたくのはあたし」とあちこちの戸をたたく、「だれにも見えない死んだ女の子」は、今なお、私の網膜のなかで鮮明にうごきつづける。

一九五四年生まれの高炯烈は、長編詩集『長詩　リトルボーイ』を完成させた。

本書に収録されている詩人のうち、被爆体験をもつものは少数であり、みな、想像力によって原爆詩を詠んでいる。時とともに被爆者が去っていくなかで、体験しないものが去っていくものたちからバトンを受け取って、その惨を、非人道性を、

詩というかたちで表し、さらに次の世代へとバトンをわたしていくこと。そんな地味な行為のなかにこそ、希望はむしろあるのではないだろうか。

こなごなになった光を集める
ばらばらになった眼をつなぎ合わせる
底知れぬほど深い湖のような
ヒロシマの眼をいくどでも甦らせるために

―佐川亜紀「ヒロシマの眼」より

解説2　原子爆弾でも負けんもの、川の水

―解説にかえて―

長谷川　龍生

私は若いときに「ヒロシマ・一九五八年」というドキュメンタルな詩劇を書いた。写真家の土門拳さんの写真集を見てからの発想である。ラジオの芸術祭参加作品であった。

（原子爆弾）が爆裂しひびいて、しばらくしてから市内の雑踏の音になり、太田川の川の流れに変化した。冒頭に一人の恋する女を登場せしめた。須美子と名のる原爆症に罹っている女の第一声は、「原子爆弾でも負けんもの、川の水」。

この最初のコトバを生み出すのに三日間は要したとおもう。難しかった。

そのときから数年経って、「原爆ドーム・日本のスフィンクス」という詩劇を書いた。やはりラジオである。

（ギターをかきならすラテン曲があり）（女の発声基礎練習があり）（再びギターをかきならす音があり）、広島駅構内の雑踏から、構内のどこかで、次の発車のアナウンスが報らされている。冒頭に一人の行商人を登場せしめた。若い行商人の第一声は、「日本の広島にスフィンクスがあるんだ。きみは、見たことがあるかい。そのドーム、そのスフィンクスを中心にして、半径一・五キロ、だだぴろく、まるい街の中に、たくさん、幽霊たちがひしめいている。原爆さん、たのむまっせ」。このドラマの内容は、したたかに生きぬく広島の群衆をいろいろな角度から採りあげた。最後に、幽霊の男に「日本のスフィンクスよ、きみは、もう、なくなろうとしてもなくならない。消えようとしても消えない。爆心地のドームよ、そこでいつまでも、うつろになって傾いていてください。はい、もう少し首をかしげて、哀れにみえてもだめなんだ。いかめしくみえてもだめなんだ。はい、もう少うし首をかしげて」。

この最後のコトバは、世の中の流れに対する現実的な疑問の暗喩である。

私には原爆の体験はない。一九四五年八月六日の翌朝、十七歳。すでに三月には大阪市内の働いていた材木商の長屋からは、空襲に遭って焼け出され、半郊外地にある次姉のあばら屋に転りこんでいた。何故かしら、朝はやく、あばら屋から抜け出した。よごれたシャツ一枚である。あるいていく方向に、一人の中年の女性が佇立していた。誰だか判らない。その女性が口火を切った。それが忘れられない。「あんさん、えらいこっちゃ、ヒロシマに、ネッセンバクダン！」私は反射的に、漢字を頭の中にうかべた。「熱線爆弾！」。

敗戦の年の十月の末旬、私は山口県吉敷郡仁保牟田の長姉の家にいく用件があり、大阪梅田駅から、無蓋貨車に乗ってまず広島まで往った。防寒の準備をしていったが、文句なく寒かった。山陽本線を一昼夜走って広島にはあけがたに着いた。見わたすかぎり広島の街には何も無かった。私が初めて見る街、広島は灰色で、行く手をさえぎるものはなく、みごとに何も無かった。私は貨車から下りて、ただコンクリートの停車場だけが残りさらされているところに、しばし呆然としていた。

広島にはなにも無い、足場のわるいコンクリートだけがある。私は一介の文学少年だったので、そのとき、峠三吉、原民喜、栗原貞子、大原三八雄の存在など、知る由もなかった。

そのときから、苦々しい現実生活は続いている。私の尊敬している知人は、労農党の大山郁夫と、詩人の小野十三郎の二人だけであった。二〇〇七年六月十九日は、私の七十九回目の誕生日である。奇しくも一八一人の原爆詩作品のゲラ刷りを

机上に置いて、わが胸の底のここには、迫るリアリティ、熱く烈しいもの、冷静に見透しの利くもの、熱い絶唱のもの、ゆるやかに、また豊かに幅のひろい視野を拡げるもの、多種多様で、寸時の悲しみなど、いっきょに吹っとんでしまい、長い時間の昂奮をおさえるのに、けんめいになっている自分自身を発見する。すばらしい詩集の圧巻が眼前に出現した。よろこびと言うか、たのしみと言うか、成功と言うか、私自身がよくぞ生きながらえたと言うか、感慨無量の想いに迫っている。はからずも、二〇〇七年の春に、私の一人娘が四十四歳の高齢出産で、男の子を生んだ。流浪、流転をかさねてきた私にとっては予想外の初孫である。その初孫にとって、すばらしいおみやげもの、行く手のわからない日本、政治、社会、経済、思想、何もかも悪い流れの方向に、じわじわと身を⊠れさせているこの日本の現実に、素晴らしい遺産が出来あがったことを、つよく⊠みしめ、はげしく意識している。よくぞ、やってくれた。実行してくれたと、長津功三良、鈴木比佐雄、山本十四尾の三氏に、そしてコールサック社に感謝の気持ちでいっぱいである。そして、この企画に賛同した一八一人の詩人たちにも拍手をおくる。

戦争を知らない世代が増えているのは、当たりまえのことであるが、戦争の悲惨さを正確に伝えていくのは、昭和一ケタ代の限りない望みである。戦争も、昔とちがって、核戦争になる。小さな紛争も、ウラン爆弾を使用しての核戦争の前ぶれになってきた。二〇〇七年の現在、アメリカとイランが明らかに対立している。裏がわには、底深い第二の冷戦情況がひかえている。イスラエルとパレスチナ。民族紛争、宗教と経済の紛争。中近東、中南米、アフリカ、もめにもめているが、この日本では、海外情報は少ない。余りにも知らされていない。原爆被災者の日本にとって、日本人にとって深く知らされる必要があるし、知る必要がある。

真綿で首を絞められるようにじりじりと悪い世の中が襲ってくる直感が私には存在している。

この一巻の詩集が、後続の勢いを得て、続々と出版されるのを希みたい。海外の詩人たちにも大いに希みたい。

解説3　「ヒロシマの哲学」に呼応する詩人たち

鈴木比佐雄

小学校時代の恩師である荒木昌己先生の兄は、長崎医大生だったが、長崎原爆で被爆死した。先生は定年退職後に絵画を本格的に描き始めて仲間たちと絵画展を時々開いている。その絵には桃畑のシリーズがあり、私はその中の一枚の絵を譲り受けて書斎に飾って、今もそれを眺めながらこの文章を記している。この世を戦争の地獄から平和な桃源郷に変えたいという思いが込められているのだろう。亡くなった兄と生き残った弟がかつて桃の花が咲く春の日に野遊びをしたことを回想しているのかも知れない。私は、恩師の戦争のない原爆のない世界を作りたいという願いを痛いほど、その桃畑の絵から感じとるのだ。そんな一本一本の桃の木に託された平和への願いや核兵器廃絶の思いを、自らの表現活動に反復することの重要性を、私は自分の詩や詩論の表現活動や詩誌編集・出版活動の中で考えてきた。

『原爆詩一八一人集』の企画編集を担うことは、私にとっていつかやらなければならない重要な仕事だと考えていた。優れた詩人たちの多くの詩篇を読んでいると、そこに広島・長崎・被爆者・無差別大量殺戮兵器などをテーマにした詩が何篇か書かれていた。私はそれらの詩篇を集めたアンソロジーをまとめたいと心ひそかに構想していた。

原爆をテーマに精力的に詩を書き続けている長津功三良さんから『原爆詩集』の話があったのは、二年前だった。大手出版社にこの企画を持ち込んでいて進行中だったとお聞きした。その一年後にコールサック社から出版した高炯烈『長詩　リトルボーイ』の広島での出版記念会は、長津さんの尽力で広島や全国から多くの詩人が集まり盛会となった。韓国から招待した高炯烈さん、通訳の李美子さんと私と長津さんは三日間行動を共にしたのだった。その間に『原爆詩集』の進展具合を尋ねると、大手出版社の出版企画が進展していないとのことだった。即座に私はコールサック社で引き受けたいと提案し、コールサック社で引き受ける場合は、過去の優れた原爆詩はもちろん収録するが、その他に現役の詩人たちが書いた優れた詩を数多く集めたアンソロジーにもしたいという考えを伝えたのだ。それから半年後の二〇〇七年春の初めに長津さんから正式に一緒にやろうとの依頼があり、今回の『原爆詩一八一人集』の企画編集が動き出したのだ。編者は長津功三良、コールサック社の編集顧問の山本十四尾と鈴木比佐雄がなり、参加詩人を呼び掛けることにした。刊行日は今年二〇〇七年の広島原爆祈念日八月六日とした。日本語版だけでなく英語版も数カ月後には出すこととした。

広島・長崎の記憶をいかに継承し、自らの問題として詩作するか――そんな課題が、実は多くの日本の詩人たちが自らのテーマ以外に抱えこんでいたもう一つの隠された重用なテーマであったのだ。その意味では原爆詩は、日本の詩人たちの「集合的無意識」であったし、これからもそうあり続けるだろうと私は考えている。私の敬愛する詩人たちは、みな自らの肉体を通した感受性や思考の深いところで原爆・核兵器・放射能・大量殺戮兵器を視野に入れた原爆詩を書いてきた。さらにいうなら、かつて栗原貞子が原爆詩は世界文学の重要なテーマであると語っていたが、今回収録した海外の詩人であるエレンブールク、ヒクメット、ゴーシュロン、高炯烈たちは、日本の詩人と変わらないか、それ以上に原爆詩の重要性を認識しその困難さに挑戦しながら書き上げている。心ある世界の詩人たちは今後も核兵器廃絶まで続く原爆詩の試みに続々と参加してくることだろう。

私がかつて全詩集を編集した浜田知章と鳴海英吉たちは、原爆体験者や関係者ではなかったが、広島・長崎の意味を考えてそこに関わろうとした詩人たちだった。鳴海英吉には『広島・碑文』という二七篇の詩集もあり、軍都広島の歴史、例えば近くで毒ガスを製造していた大久野島のことを含め広島を他者からの視点で多面的に浮き彫りにしようと考えていた。また浜田知章は、一五年戦争が終わって大阪に復員した後に、どうしても広島を見たいと願い、その地に立った。若き浜田知章は広島をつぶさに見て、心に刻み込んだ。宿泊した旅館の女将の娘は、横顔にケロイドが残る原爆娘だった。浜田知章はその乙女との会話から、原爆の悲惨さと同時に、敗残兵である自分が乙女によって労られ、癒されていったことを半世紀以上も経った一九九〇年代後半の詩「弄獅子（らぬさし）」で記している。浜田知章は一九五二年に編集発行していた詩誌「山河」十二号で「原爆詩特集」を組み、自らは詩「太陽を射たもの」を書いた。この詩は、その特集に収録された長谷川龍生の詩「追う者」を読み、浜田知章の言葉でいう「感動の伝染性」によって一気に書かれたという。若き二人の詩人の相互影響が生み出した、原爆を体験していない詩人たちが書き上げた優れた原爆詩の誕生であった。と同時に、彼らは原爆を製造し広島・長崎に落としたアメリカの加害者責任を世界的な視点から徹底して問い続けるべきだという強靱な意志をもった詩人たちだった。一九四五年七月十六日に核実験をした後に、広島にウラン型原爆、長崎にプルトニウム型原爆を投下したことは、一つの都市を一つの爆弾で完璧に破壊することを目的としていたことは間違いない。この理性が狂気でないと誰が言えるのか、そう二人の詩人は見据えていたのだ。その詩作行為の反復である「感動の伝染性」をまた多くの日本の詩人たちも無意識に背負っているのではないかと考えられる。

私は学生時代に詩「追う者」や「太陽を射たもの」を読んで衝撃を受けた。その思いが自らもまた原爆詩を書くことにいつしか⊠がっていったのだ。彼らは日本が戦前にアジアで犯した侵略行為や、アジアの民衆を蔑視し優越感を抱いた日本の軍隊軍人の戦争責任を内面から生涯をかけて問い続けようとしている。原爆を楯に戦争責任を回避しようなどとは誰も日本人は思っていない。峠三吉が一九五一年に『原爆詩集』を出す動機の一つは、原爆が朝鮮半島で使われるかも知れないという危機感を持ったことだ。また原民喜の自死も、朝鮮戦争で原爆使用があるかも知れないことへの抗議であったと広島の人々の間で語られてきた。広島・長崎の詩人たちは、原爆を広島・長崎で最初で最後の使用にしなければならないという普遍的で人類的な視野を持って原爆の悲惨さを語り継ぎ核兵器廃絶を目差していこうとしていたのだ。アメリカの人々は誤解してはならない。このアンソロジーはアメリカを裁くことが目的ではない。原爆・核兵器が本当にこの世界に未来永劫に渡って存在し続けていいのかという問いを突きつけ続けているのだ。原爆雲の下にはあなたたちと同じ人間が暮らしていたのであり、一つの都市をそこで暮らす人々を一瞬で破壊してしまう無差別暴力がこの世に存在していいのかという問いだ。そんな核兵器を前提にした世界観が本来的で正義にかなった未来の人類の故郷になりうるか、そんな問いをアメリカを含めた核保有国である国々の民衆にこのアンソロジーの英語版に託して届けたいと考えている。

一九四五年沖縄戦で最後の海軍は壊滅し、陸軍の主力は海外にいたのであり、日本は制空権もなく物資も底を突き降伏寸前であり、マッカーサー元帥などの最前線の将軍たちは原爆を落とす必要を考えていなかった。日本本土上陸で五十万人の米兵の命を救ったという主張は、じつは数万人を誇張したとも言われている。しかしアメリカの自由とは、ドイツが原爆を作ることの恐怖心からアメリカ国家予算の数倍である二〇億ドルを使われた納税者に報いるために、真珠湾攻撃の報復を持ち出すことによって正当化し、ソ連の南下を押さえるという国益のために無差別大量虐殺を犯してしまった。そのことの根源的な意味が検証されていないために、アメリカは枯れ葉剤を投下し続けたベトナム戦争、劣化ウラン弾を使用したイラク戦争などでも同じ間違いを犯し続けている。冷戦を終結させたロシアのゴルバチョフはそんなアメリカを評して「勝利の病」と言っていたが、その病の根源にマンハッタン計画の成功による戦後社会の核兵器による恐怖の支配があり、それはほころびながらも今も継続されている。自らが正義であるという理性を狂気に転化させないための「理性批判」がアメリカの政治の意思決定には欠落しているのだ。その病の根源には、文化の多様性への寛容さが欠如している、その場所と共に生きている歴史を担う民衆への畏敬の念が欠落している。二十世紀はアメリカの正義が不条理な神になった世紀であったが、二十一世紀になってもアメリカのマンハッタン計画を真似る国々は後を絶たない。アメリカ的な支配論理がアメリカの根幹を崩し続けているのだ。その根本的な解決は、アメリカがマンハッタン計画を根本から見直し、永遠の国益に見合うものか問うこ

とだろう。そんな時期がきっと来るだろう。それは原爆投下後七十年後か八十年後であるかどうかは、アメリカ国民が決める問題であるが、自由と民主主義を国是とするアメリカは、「名誉ある転回」をすべきだ。核兵器を廃棄するというリーダーシップを執るべきなのだ。それしかアメリカの名誉は回復されはしないだろう。私は「反マンハッタン計画」である核兵器廃絶の「ヒロシマの哲学」こそが人類や世界の未来を救う唯一の道だと考える。それは広島・長崎をナショナリズムを超えた場所として位置づけ、かつてフッサールが構想した故郷と異郷の対立を超えた場所、その根底にある世界市民の「原故郷」としたいという願いだ。

あの日、一瞬で肌を引き⊠がされ、眼球を焼かれ、言葉にできないほどに破壊され、人間の尊厳を⊠奪されながら水を求めてさまよい死んでいった日本人・在日朝鮮人など数十万もの被爆者たちの魂は、今も広島・長崎の地をさすらい浮遊している。原爆を体験した被爆者も高齢化し、生きている時間に核兵器廃絶の日が来ることを願っている。そんな被爆者たちと共に、原爆詩を書き継いでいる詩人たちもその願いに呼応し反復し続けているのだ。

本詩集に参加してくれた現役の詩人たち、快く掲載を承諾下さったご遺族の方々に心から感謝したい。一篇一篇の詩の力が「感動の伝染性」となって世界市民の精神に広がっていくことを願っている。世界中の詩を愛する人々、核兵器廃絶を願う人々に読んで欲しいと思う。

編者あとがき

決して風化しない証を世界に

山本十四尾

原爆が投下されて六十二年。御庄博実が丸屋博の名で編集していた被爆体験記『ピカに⊠かれて』が第二八集をもって終刊としたのは二〇〇五年七月十五日であった。私はこの誌から原爆資料館にはない人間の生の声をきいたように思う。御庄博実から直接、手渡された終刊号は私の机上にいまでも端座している。世界に類をみない『ピカに⊠かれて』が終刊に至った理由は編集する人たちが高齢化したためである。私はこの終刊でヒロシマを一歩風化させてしまうという危惧を持った。六十年もたてばメディアの取扱いも薄味になり、追悼の行事もヒロシマ・ナガサキの地域限定という発想がなきにしもあらずである。

しかし核についての制御はいまもなお予断を許さない。その緊張感は退化・退色しない世界の動向である。換言すれば原爆については決して風化させないとする日本人の世界への発信は重要度をあらためて増しているといえる。このような世界の現況のなか、このたびの『原爆詩一八一人集』はきわめて意味するところは深い。つまり二〇〇七年の只今詩を書きつづけている詩人から多くの賛同を得、作品を編集できたことは、ヒロシマ・ナガサキは決して風化しない証を世界に開示できるものとの確信を得た。確実な継承をここに提示するものである。

二〇〇七年六月　古河にて

原爆詩集のことなど

長津功三良

広島に生まれ育って、勤めなどで長い間離れていたとはいえ、自分の中で「ひろしま」から離れることはなかった。大戦の終わり近く子供でもあったので縁故疎開をしていて、直接原爆に遭うことはなかったが、かえってそれが長い間亡くなった友人や被爆者たちへの引け目となって、若い頃から詩を書き始めてからも目をそらし続けていて、やっとこのところ真正面から見詰めることができるようになってきた。

自分の中に三つの「ひろしま」がある。一つ目は、戦前の静かな佇まいを見せていた古都広島、そして別に軍都の顔。二つ目は、消滅し惨憺たる無差別殺戮の跡、爆心地の近くの被災者用急造住宅に棲んで、新聞配達をしながら裸足で焼け跡を歩き回った時代。三つ目は、長い東京などでの勤め人生活から戻って、復興し緑美しい政令都市の現在。その三つの現実の鬩ぎ合いのなかで詩を書き、書き残さねばならないと思うようになった。

「原爆詩集」については数年前から構想があり、もう長く纏められていなかったので次の世代へ語り継ぎ残るものを何とかやりたいと願っていた。長谷川龍生さんなどとも話していたが、漫画すら売れない時代に、コマーシャルベースには載らないらしく、なかなか進まなかった。はじめ、人数も絞り新書か簾価版で中高生を対象にと、友人のいる硬派の出版社に持ち込んだが、うまくいかず企画をいったん取り下げたが、コールサック社の鈴木比佐雄さんと山本十四尾さんが話に乗ってくれて、急遽実行することになった。

当初より拡大して参加を呼びかけ現在の形に纏まった。多くの人たちの協力をこころから感謝している。特に鈴木比佐雄さんの尽力には驚嘆している。有り難い実行力である。

なんとか今年の八月六日までには発行を間に合わせたいとの思いから、まだ積み残し、遺族の了解が得られないで掲載を諦めるなど、充分なもの、とは言い難いが、物故者を含め一八一人の参加を得られて立派な本が出来上がったと思っている。これは二〇〇七年版として、いずれもっと完全な形で作りたいものと願っている。

大切なことです、皆さんどうか、目を通し、声を出して読み、そして子供たちに、語り継いで下さい。

二〇〇七年六月　岩国にて